

令和5年7月20日
1学期終業式

“探究”を中核にすえた教育活動の推進に向けて



佐賀県立武雄高等学校
校長 下村 昌弘

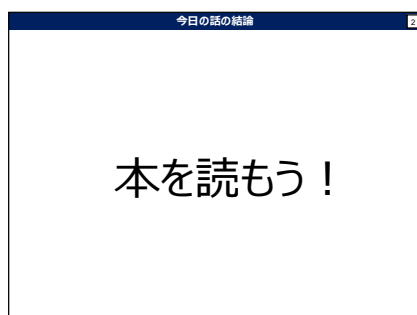
全校の皆さん、おはようございます。学校長の下村昌弘です。

今日は1学期の終業式です。令和5年度がスタートして約100日ちょっとが経ちました。皆さんいかがだったでしょうか。

3年生の皆さん、勉強のペースはつかめてきたでしょうか。1・2年生のみなさん、授業を中心に、部活動や校外活動など、自分らしさを磨く取組を進めることができましたか。

今日は節目の日ですから、自分なりにきちんと総括することが大事です。そして、“人間、たいていのことは100日あればなんとかなる”といえますから、これからの100日に向けて気持ちを新たにしましょう。

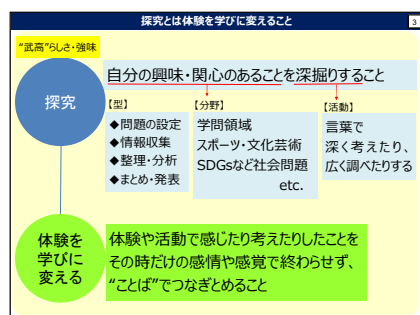
そこで、私からは、夏休みへの期待を込めて少し話をしたいと思います。折角ですから、できればTAKE OFF手帳にメモしながら、聞いてください。



今日の話の結論は「本を読もう」ということです。“なんだそんなことか”と思うかもしれませんが、3年生の皆さんも“そんな暇はない”と思ったかもしれませんが、まあ聞いてください。

読書を薦めることは、どの学校でもやっていることで、特段珍しいことではないかもしれませんが、私が皆さんに読書を薦める理由は、他の人とは少し違うかもしれません。その理由を今から順序だてて説明します。

この話が終わった後に「なぜ本を読まねばならないのか」という問いに答えられるように聞いてください。



まず、本校の「らしさ」、武雄高校の「強み」についての確認からです。

武雄高校は、学校教育目標に詳しく文章で示していますが、一言で言うと“探究”を中核に据えた教育活動を推進する学校です。

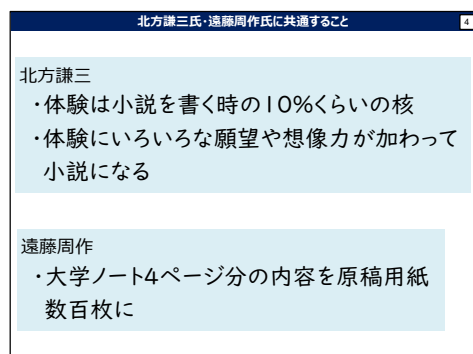
これは「総合的な探究の時間」そのものが大事だということはもちろんですが、ここで学んだ4つのステップ、探究の型が大事で、各教科の勉強においても、その型を実践することをとおして、これからの時代を生き抜く基盤を作っていくことができます。だからこそ、この“探究”を武高生の基本的な型にしてほしいと思っています。

探究とは自分の興味・関心のあることを深掘りすることです。それは言葉を変えると、体験を学びに変える、学びを体験に生かすということです。

興味・関心のあることとは、もちろん国語や数学・理科など教科・学問的な分野でもいいし、スポーツや文化・芸術活動、あるいはまちづくり、SDGsなど現代的な問題でも構いません。

いずれにせよ、自分に一番じっくりいく、納得のいく、最も自分らしいと思える分野を選び、実社会・現実世界とのつながりの中で学びを実感してほしいと思います。

そして、そこで感じたこと・考えたことを一時の思い出や感想レベルで終わるのではなく、言語化することが体験を学びに変えるということです。

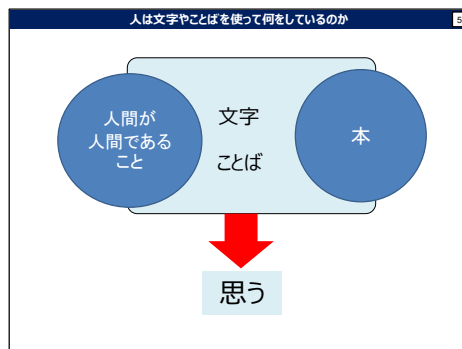


ところで、皆さんは北方謙三という作家を知っていますか。佐賀にゆかりのある小説家ですが、ハードボイルド小説や歴史小説でたくさんの著作を残していっぱいます。

その北方氏は「体験というのはたぶん小説を書く時、10%くらいではあるが固い核

になっている。あとはその体験に、いろいろな願望や想像力が加わって小説になっていく」と言っています。

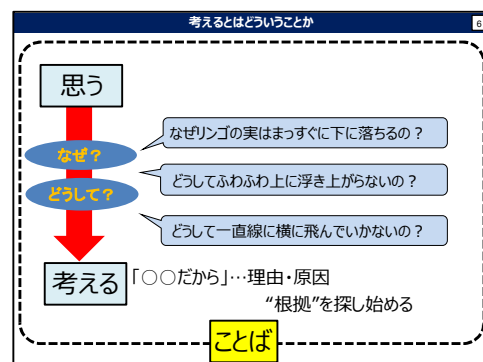
遠藤周作氏も『沈黙』を書くにあたって長崎や上智大学で取材して知りえた、いわゆる“転んだ”宣教師フェレイラに関するわずか大学ノート3ページの内容から原稿用紙数 100 枚を書いて「僕は天才じゃなからうか」と冗談交じりで言っていますが、二人に共通するのは、“事実”、“体験”を核としながら“思い”、“想像力”でそれを育て上げたということでしょうか。



ところで、小説をはじめ、「本」というものは、「文字」すなわち「ことば」でできています。「文字」と「ことば」を持っているのは人間だけです。「文字」や「ことば」を集めたものが本であるわけですから、「本」と「私たちが人間であること」とは切っても切れない関係ということになります。

では、その「文字」や「ことば」で私たちは何をしているのでしょうか。

「文字」や「ことば」にはいくつかの働きがありますが、その中でも、一人の人間として最も重要な機能、それは「思う」ことです。私たちは日常、「文字」や「ことば」を使って何かを「思っ」ています。



この「思う」ことは「考える」ことの第一歩です。

では、「考える」とはいったいどういう状態をいうのでしょうか。私たちはどんな時、単に「思う」ことから一歩踏み込んで「考える」ことをするのでしょうか。

ここで 18 世紀のイギリスの科学者アイザック・ニュートンの有名な話を引き合いに出してみましょう。真偽のほどはさておき、この話は誰もが聞いたことがあると思います。

ニュートンはある時、野原で寝そべりながらそこに生えているリンゴの木を眺めて

いた。そこでふと次のように思ったのです。「なぜリンゴの実はまっすぐに下に落ちるのだろう」と。

普通こんなことは思いません。なぜ彼はそう思うことができたのでしょうか。

その「思い」は、裏を返すと、彼に次のような「なぜ」が思い浮かんでいたと思われる。

それは「どうしてリンゴの実はふわふわ上に浮かび上がらないのか」あるいは「どうしてリンゴは一直線に横にとんでいかないのか」という「思い」です。

ここには「なぜ」「どうして」という疑問があります。

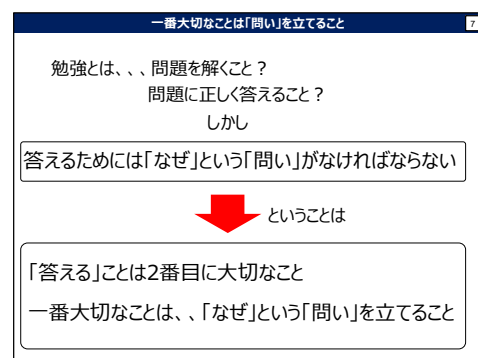
ニュートンには普通の人が思い至らない疑問が湧いたのです。よくそんなこと思ったなあと思いますが、とにかく、彼が「なぜ」と思うことができたのは「リンゴの実が必ずしも下に落ちなければならないわけではないのではないか」、「上に浮かび上がっても、横に飛んで行ってもいいのではないか」という思いに至ったということです。

「なぜ」という問いがひとたび生まれると、今度はそれに対して「何々だから」という答えが与えられなければなりません。その「何々」を求めて人は考え始めるのです。

この「何々」のところには、理由であったり、目的であったり、原因であったり、そういったことが入ります。これをひとくくりに「根拠」と言ってもいいです。

少し整理しておきます。ここまでで私が言いたいのは、「考える」とは「なぜ」と問い、それに「何々だから」と「根拠」を探すということが一連の流れになるということです。そして「ことば」なしにはこの一連の流れは成り立ちません。

ここまでいいですか。ついてきてくれていますか。

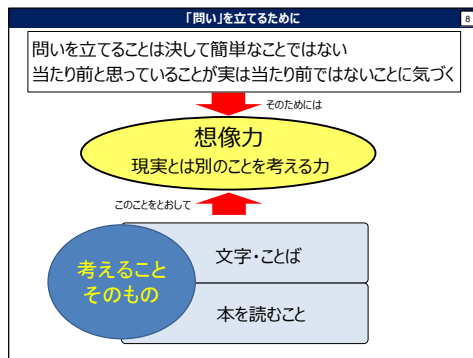


話を進めます。

ところで、皆さんは勉強というものを「問題を解くことだ」と思っていないでしょうか。入試にしても定期考査や模擬試験にしても問題が与えられてそれに正しく答えられるかどうかで点数がつくわけですから、そう思うのも無理はありません。

しかし、実は勉強というものはそれだけではありません。

なぜなら、そもそも答えるためには、「なぜ」という「問い」がなければならないのです。ですから、「答えること」は言ってみれば2番目に大事なことであって、一番大事なことは「なぜ」という「問い」を立てることだということになるわけです。



けれども、「なぜ」という「問い」を持つことが決して簡単なことではないこともニュートンの話は教えてくれています。

私たちはリンゴの実が落下することも机の上から消しゴムが落ちることも当たり前だと思ってそこに「なぜ」と問われるべき大切な何かが隠されていることに気づきもしません。

ここからがこの話の“肝”です。

この問題に気付くためには、、、普段、私たちが当たり前と思っていることが、実は当たり前でもなんでもないことに思い至らなければなりません。

では、そこに思い至るためには、何が必要だと思いますか？

それは、、、「想像力」です。「想像力」によってはじめて、当たり前が当たり前ではないことに思い至ります。

「想像力」とは現実とは別のことを考える力です。そして「想像力」豊かな人ほど「なぜ」という「問い」を、よりたくさんもつことができる人なのです。

そしてこの「想像力」にも「文字」「ことば」が決定的な役割を果たしています。さあ、「文字」「ことば」、すなわち本の話に戻ってきます。

皆さんは本を読むときにいろいろなことを考えますよね。

例えば小説を読んでいて、主人公がいろいろな事件に巻き込まれたり、いろいろな経験をしたりする。そこで、ドキドキ、ワクワク、「これはいい」「うわー、せつないー」といろいろ考えるはずです。それは裏を返せば、皆さんの生活が必ずしも現実のままでなくても全然かまわないことに気づいている証拠なのです。皆さんの想像力が刺激され、あれこれ考えているわけです。

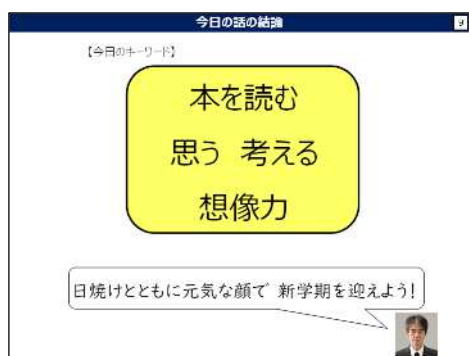
本を読むことは、このように、考えることそのものなのです。

私は大人であることの条件の一つは自分の頭でものを考えることができることだと思っています。

しかし、このことは、繰り返し言うようですが、それほど簡単なことではありません。だからこそ、何よりも、若いうちに柔軟な「想像力」を養うことが大事だと思っています。

「想像力」すなわち「考える」ことがより自分の生活を豊かなものにしてくれます。より、深く思う、より、深く考えることができれば、生きることに幅や厚みが出てきます。

さて、「なぜ、本を読まなければならないのか」、もう、答えられるでしょうか。



生成 AI の話題も 7 月 1 日の TAKE OFF Press で触れましたが、チャット GPT に作らせた感想文の丸写しなど、思考を放棄した活用は全く意味がありません。言葉を使って自分の頭で考える、想像する、この体験が今の年代の君たちにとって、とても必要なことです。

夏休み、皆さんに少しだけかもしれませんが、自分の時間が戻ってきます。どんな種類の本でもいいから普段はなかなか取り組めない、まとまった読書に挑戦してみたいと思います。それを面白いと思えば思うほど皆さんはいろいろなことを思い、考えるはずです。

そして、考えれば考えるほど、皆さんの毎日は想像力によって豊かなものになります。

3 年生の皆さん、まだ「それどころではない」という感じですか？ 1・2 年生の皆さんもしっかり聞いてください。

本当に賢い人は、1 つの読書に疲れたら違う種類の本を読んで頭を癒します。数冊並行して読書するわけですね。探究活動、大学入学後の勉強も 1 冊の読書で完結することはありません。共通テストも複数のテキスト、資料で考えさせる問題が出題されています。

受験生だからこそ、日常的な学習の中で文字や言葉を大切にするのはもちろん、少しの読書でもいいから、そこで頭をほぐし、切り替え、モチベーションを上げることができます。

しかし、実は、それこそが、一番頭を鍛えてくれるチャンスでもあるという意味で、好きなくとも一冊の本は、常に手元に置いてほしいと思います。きっと生活に厚みを加えてくれるはずです。

では全校の皆さん、「文字やことばでものを考える」ということをとおして、一段と成長し、元気な顔を新学期に見せてくれたらうれしいです。ではよい夏休みを！